



奥多摩ではじめる、  
はじまる。

Start! For The Future

# BLUE+ GREEN JOURNAL

Okutama Town Official Magazine

奥多摩町公式タブロイド

# 08

Eighth ISSUE

# START! FOR THE FUTURE

奥多摩ではじめる、  
はじまる。

当たり前のことが当たり前でなくなった暮らし。

それでも、野山には鳥が騒り、川はとめどなく流れ、季節は日々、巡っていく。

そんな大らかな自然の営みを実感すると、不思議と心が勇気づけられるだろう。

2020年秋、この町のそこかしこで芽吹いている新しいモノ・コト。

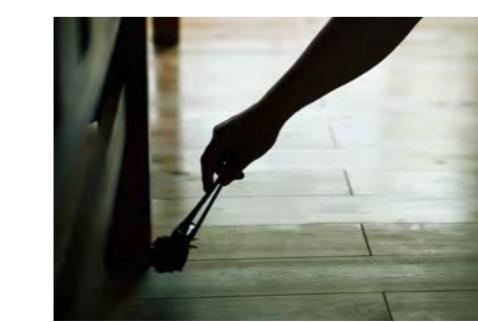
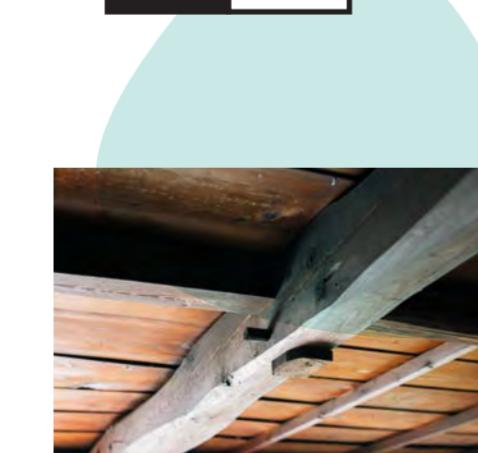
豊かな自然がポジティブな作用を生む、

この町ならではのブランニューなストーリー。

東京最高峰・雲取山の頂へと続く道より。雲海の間から、もうすぐ陽が昇る



#01  
西田和哉さん  
—きよかわゲストハウス  
ゲストハウス、  
はじめました。



た。それから旅をする時はゲストハウスばかりに泊まるようになっていって」

以前はウェブ制作のエンジニアとして会社勤めをしていた西田さん。社会人2年目で早くも会社員に向いていないことを悟ってしまう。同時にハマり始めたのがゲストハウス巡り。当初は京都や浅草でゲストハウスを始めるという構想もあった。その後、全国を見て回るなどして決まっていた条件は2つ。関東の田舎であること、そしてゲストハウスがまだない場所だ。「最初は房総半島に目をつけたんですけど、ウマが合わなかった。その次に目をつけたのが奥多摩でした。人づてで何人かの人を紹介してもいい、話を聞いてもらうと非常にウェルカムな感覚でした。応援してくれる雰囲気を感じて、この場所ならやっていくぞうだな」と

その後、奥多摩の人脈を広げながらじっくり物件探しを続けた西田さん。その流れでようやく見つけたのが今の場所だ。奥多摩で探し始めて3年半もかかった。理想の物件にたどり着くまでは不安も押し寄せたという。これほどまで見つからないものかと一時は鬼怒川など別の場所に、照準を変えそうにもなった。

「確かに折れそうになった時期もありましたけど、根が楽観的ですから。根拠のない自信もあってまあなんとかなるでしょう」と。結果的にこんな最高の建物が見つかって、三年半粘ってよかったなと思います」

人が楽しく過ごしている姿を眺めるのが楽しいと語る西田さん。建物内ではバー営業も行い、新たな人間関係が生まれる場をプロデュースしていくといった楽しさを輝かせた。オープンはもう間近だ。

**きよかわゲストハウス**  
奥多摩町氷川186  
キャパシティ:14名  
<https://kiyokawa.okutama.town>





# KICK OFF! THE TOKYO EMU RANCH

「実は、奥多摩には第一次産業が少ないですね。2015年の調査だと人口約5000人に對して農業従事者は40人程度しかいませんでした。そういう事実を知って、この土地で何かを生産したいと考えるようになった」

こう話すのは地域おこし協力隊で奥多摩にやってきた加藤洋志さん。目をつけたのはなんとエミューだった。エミューはもともとオーストラリアに生息する「とべない」鳥。加藤さんはこの鳥の牧場経営を行おうとしているのだ。

「奥多摩にはジビエの食肉処理施設があるでしょう。調べてみると、ここでエミューを食肉にできることが分かったんです。そもそも僕はジビエの振興に興味があって奥多摩にやってきた。そういうアイデアがすべてつながってエミュー牧場をやってみようと考えたんです」

加藤さんが管理する敷地を訪れてみると、そこにはすでにエミューが4羽。牧場開設に向か、準備は順調に進行しているという。いずれは牧場で育ったエミューの肉が奥多摩の観光における目玉になるかもしれない。想像しただけでも

ワクワクする取り組みだ。「エミューの肉は高タンパクで高鉄分、しかも低脂肪。肉としては非常に優秀なのでアスリートなども注目しているんです。調理は低音で火を通して、レアっぽく食べるのがオススメかな。牧草のような味わいというか、自然を感じる味と牛の中間といった感じです」

エミューを選んだのは管理が比較的容易であること。そしてまだ日本では珍しい食肉であること。まずはしっかり育てることを証明し、繁殖させ、採卵をして、幼鳥が大人になった時、いよいよ食肉として出せる状態になるとどうぞうに話す加藤さん。およそ3年後には、奥多摩で育ったエミューの肉を食べられるようになるそうだ。

「昔は奥多摩の峰谷で羊が飼われ、ジンギスカンハウスという施設が人気を博したそうです。自分もエミューの肉をコンスタントに提供できるようになって、さらには牧場から雇用が生まれるようになればいいなと思っているんです」

聞けば、小学校6年生の時、壇上に立って将来の夢を語ったという加藤さん。その時、話



女の子が生まれたら、桐の木を植える。そして嫁ぐ時、大きく育った桐の木でタンスを作って持たせる。古くから日本人の暮らしとともにあった「桐」。今では、すっかりその風習もなくなってしまい、桐の木を見かけることもめっきり減った。

「林業と同じで育てる人がいなくなってしまったんですね。でも、最近では、建築の建材としてあらためてその価値が見直されてきています。スギやヒノキは植えてから成長するまで40年かかりますが、桐は成長が早く15~20年で使えるようになります。しかも、調湿性に優れており、軽量で耐久性も抜群に高い。そして、燃えにくいという特徴もある。道具としても家具材としても優秀なんです」

そな語るのは、海沢在住の一級建築士・丸谷晴道さん。2019年4月に横浜市から家族5人で奥多摩町へ移住してきた丸谷さんは、建築家として、森林が広がる町のいち住人として、桐の可能性に着目。住民によるまちづくり活動を支援する「奥多摩町まちづくり推進事業」に応募して、2020年6月から桐を暮らしにとりもどすためのプロジェクト「kiripro(きりぶろ)」をスタートさせた。

今年度では、合計5回のプログラムを実施予定で、1回目は旧古里中学校の「おくた森の工作室」で勉強会を開催。2回目は、奥多摩在住の木工作家・羽尾芳郎さん(椿堂)の指導のもと、桐を使った下駄の製作体験などを行った。このほか、山の中を歩いて奥多摩周辺の林業について

学ぶ回、桐材を使用している飯能市の家具工場をたずねる回、桐を使った正月飾りをつくる回など、好奇心をくすぐるさまざまなワークショップ企画。大人も子供も楽しみながら、桐について学べるユニークなものばかりだ。

「桐のことを知ってもらうのはもちろん、桐をきっかけにして、木のことや山のことを考えるきっかけになればいいと思っています。日本中で林業の問題が叫ばれていますが、奥多摩町もスギ・ヒノキの人工林が主。手入れをされず、放置されたままの暗い森も少なくありません。高木や低木、色んな種類の木があるのが、山本来の姿。持続可能な未来のためには山の生態系を取り戻すべきだと思っていて、そのためには、この町に暮らす人たちが、山のこと、森のことに関心を持ち、身近に感じられる機会が大切です。とくに奥多摩の子供たちに向けて、そういう機会をもっと作れたらな、と思っています」

なお、今後は「学ぶ」系のワークショップのほか、町内で桐の植樹も実施していくと考えているそうだ。

「おもしろいのは、桐って分類上“木”じゃなくて“草”なんですよ。だから、林業はならない。わざびやしいだけと同じ「特用林産」という分類になります。そういう意味でも、奥多摩にはピッタリな気がして。畑のように桐を植える人が増えて、町の1つの産業になっていけばいいな、と考えています」

桐からはじまる森づくり、町づくり。希望あふれる試みに、今後も期待していきたい。



Harumichi  
Maruya

#04  
丸谷晴道さん  
一級建築士  
/ kiripro  
**桐の魅力発信、  
はじめました。**

JR 古里駅から徒歩 6 分。山々を見渡す絶好のロケーションに、ブルーのグラデーションが美しい小さな平屋が建っている。一見、お洒落なカフェでもできたのかと思いや、立てかけられた看板を見ると、「niat photo studio」の文字。そう、ここは、2020 年 5 月にオープンした奥多摩唯一の写真館である。

「ここから望む四季の風景が気に入っているんです」と、柔らかい笑顔で語るのは、写真館を運営するカメラマンの山口まり子さん。ブライダルフォトグラファーとしてキャリアをスタートさせた山口さんは、その後、ラフティングをはじめとするアウトドアのカメラマンとして埼玉県長瀬町で活動。そして、ハウススタジオで経験を積んだのち、約 3 年前に奥多摩町に移住した。フリーランスのカメラマンとしてポートレート、イベントや店舗撮影など、さまざまな案件を手掛けている。「呼ばれればどこへでも」というスタンスで町内外を飛び回る山口さんが、ここ奥多摩町に新しく写真館

をオープンしたのは、「真正面から向き合ってお客様の魅力を引き出せる場がつくりたかったから」だという。

「お客様とコミュニケーションをとりながら撮影するスタジオの仕事って、なんとも言えない幸せを感じるんです。その時だけの生の感動がある。大好きな撮影をいつでもできるようにいつか自分のスタジオを持ちたいと考えていたんですが、それなら、家の使用していない一室をスタジオにできないかな、と。地元の工務店さんや様々な方のお力を借りて改修を進め、無事オープンすることができました」

長屋のような平屋は、住居と店舗スペースをきっちり分けられた構造。日当りのいい空き部屋をリフォームし、絶妙な光が回りこむ撮影空間を作った。背景となる壁の塗装にもこだわり、「さざなみ」をイメージした淡いブルーの壁をはじめ、色も風合いも異なる 3 面を用意。被写体の雰囲気や希望に合わせて使い分けている。



©niat photo studio

「niat photo studio」では、撮影した写真をデータだけではなく、プリントし、額装して手渡すという。こだわりの額装は、地元の木工作家に依頼したものなど複数のパターンから要望に合わせて提案。そこには、山口さんの「そのときの気持ちを形に残して欲しい」という願いが詰まっている。

「日常の幸せやちょっとした記念日を、しっかり写真に残して家に飾ってもらうことで、写真を見る度にその幸せを思い出してくれたら嬉しいと思っています。私自身、落ち込んでいたときに、ある写真を見てすごく救われた経験がある。『助ける』までいくとおこがましいんですけど、写真にはきっと人の心を動かす、なにかしらの力があると信じているんです」

かつては、どのまちにも人生に寄りそう写真館があったように。きっと「niat photo studio」も、この町の住人にとって大切な存在になっていくに違いない。

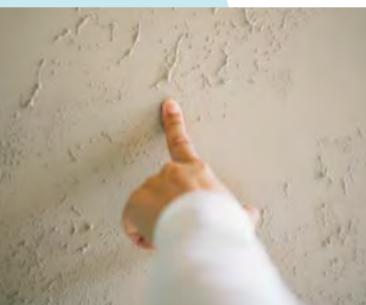


#05  
山口まり子さん  
niat photo studio  
**はじめました。**

写真館、



Mariko Yamaguchi



niat photo studio  
instagram:@niat\_photo\_studio  
info@niat-photo.com



# SOMETHING NEW IN MY LIFE

奥多摩の人たちに聞きました! 新しくはじめたモノ・コト 大集合

岡村 裕美さん (42歳)  
DTPデザイナー・イラストレーター

2020年8月より、奥多摩生まれ奥多摩育ちの、獵犬の血をひくビーグルの仔犬を飼い始め、慌ただしくも充実した日々を過ごしています。2021年の春に、奥多摩駅近くの老舗旅館の片隅にて、古本と喫茶のお店を開業予定です。コロナが終息し、奥多摩の皆さんとお会いできることを願っています。

中山 茂大さん (50歳)  
ライター

今夏、初めて「ノマドワーク」に挑戦。来年は車を新調して本格的な「ノマドライター」を目指します。

宮崎 俊太さん (62歳)  
バンブーロッド・ビルダー

前々から考えていたことだけれど、囲炉裏復活に本腰を入れようかなと思っています。

島崎 真佐美さん (48歳)  
事務職

奥多摩に戻ってきて、沢山のライダーさんがいらっしゃるのを見た!昔からバイクに乗りたい!と思っていた気持ちを思い出し、ペーパードライバー30年!初挑戦しました!

本間 美郷さん (31歳)  
アウトドアガイド・ヨガインストラクター

コロナの時、近所に住む仲良し夫婦と一緒によく裏山にお散歩に行きました。自粛がなかつたら、多分、近所の裏山にお散歩に行くことはなかった。ご近所にもいいところがあることを知りました。コロナ自粛中にも関わらず、ストレスフリーでんまり普段と変わらない生活が送れたのはやっぱりこの奥多摩の環境のおかげ。驚いたことは、多摩川がどんどん日に日に綺麗になっていったこと。去年の台風19号のあと、小河内ダムがすごい濁りてしまって、多摩川の濁りもなかなかそれなかったんですが、それがコロナ自粛中にどんどんきれいになりました。中国の大気汚染や、インドのガンジス川のように、この奥多摩でもいい影響があったのかな?とにかく、奥多摩がもっと好きになりました!!

森敏さん (58歳)  
塾講師

私は1年以上休んでいたことを再開しました。「機織り」です。やっぱ、楽しいです。た~てこの糸によ~この糸を通す繰り返しが、なぜか心を温める♪んです。私は密かにこの行為を、「olu'olu」と呼んでいます。ハイイ語で「喜び・優しい・心地よい・親切な」という意味があるそうです。奥多摩には、「olu'olu」のすべてがあります。don't think just feel!ブルースリーの言葉で締めます(笑)

出口 風我さん (43歳)  
サイクリングツアーアレンジャー TREKKLING

友人に誘われ、7月に久しぶりの登山をした。平日の登山だったため、すれ違った人は数人。人混みを避けながら、日頃のストレス発散に最適だった。より奥多摩を知りたいという気持ちと、体力強化を目的に、これを機に月1奥多摩登山をはじめてみようと思った。それと、もう1つ再開したことがある。ここ10年位、なかなか時間が取れず遠ざかっていた釣りだ。一人でひとりとやるには早朝かなと思い、体力が余っている時は朝5時起きで、6時位には釣りを始め1時間半位、渓流ルアーを楽しんでいる。お客様さんにもぜひ楽しんでもらいたいと、電動アシスト自転車で効率良く渓流釣りを楽しむルートも考案中です。

大澤 由香里さん (54歳)  
町議員

足の筋力の衰えを実感し、入浴後、つま先立ち運動を始めました。最初、20回が限界だったのが最近は100回OKに!毎晩、欠かさずやってます。おかげで坂道も少し楽になりました!

川越 錬さん (31歳)  
会社員

プログラミングの勉強を始めました。その成果があり、愛犬が毎朝LINEでゴミの日を教えてくれるようになりました。

村山 英治さん  
自営業

4月から集金仕事が止まっている。ただ、稼ぎと無関係でも作りたかったモノは山ほどあるので、暇になることはない。コロナ対策の自家用人工呼吸器のポンプ部分は完成。酸素発生機、酸素濃度計測、呼気圧制御等の課題が残ったまま。卓球マシンはピンポン回収装置を残して完成、さらに300km/hショットに向けて改良中だ。CO2制御装置は、詳細設定ブラウザ以外は完成。ソーラー電撃柵は設置して実証実験をする手前。推力エンジンの資料を作成し、物理学科の同期数名に配布。メールでは無くVideo会議をやりたいが、個人情報漏れを嫌うメンバーが多く実現しない。僕の新しい生活様式は定着しつつある。

坂村 徳子さん (54歳)  
ヨガインストラクター

奥多摩ヨガサークルで講師をしております。コロナの影響で活動がお休みになったので、YouTubeでヨガの勉強を始めました。小河内に住んでいても様々なインストラクターのレッスンを受けられ、新たな発見がたくさんありました。最近は海外物にも挑戦しております。体重は減りませんが、筋力はついた気がします。サークル活動再開で少しづつレッスンに取り入れ、自分でもより運動が楽しくなりました。

八木 茜さん (39歳)  
事務職

家で料理する時間が増えたのでキッチン用品を断捨離。スッキリと使いやすい収納にしたいと思います!

原島 日出男さん (44歳)  
奥多摩町ガソリンスタンド勤務

トレーリランニングを始めました。辛い時もありますが、美しい景色と達成感は最高のご褒美。あらためて奥多摩の魅力を体感する事ができて嬉しく新鮮な日々です、感謝。

羽角 保子さん  
GottaCoffee

奥多摩駅2階にコーヒー専門店を開いて1年になりました。今年は、おうちカフェを楽しんでもらうお手伝いができるならいいなど、オンラインショップ「アマノガワ」(<https://amanogawacoffee.jp>)を開設しました。ご注文いただいてから焙煎して発送を行ってます。

八木 葦さん (7歳)  
小学2年生

ビーズでアクセサリーやストラップを作っています。

岡部 慧人さん (11歳)  
小学6年生

新型コロナの影響で5ヶ月間も屋内の卓球ができなかつた。思いっきり運動したかったので、少年野球をはじめた。この夏はみんなで力を合わせて2大会連続でメダルをゲット!

岡部 正樹さん (48歳)  
鳩ノ巣釜めし

撮影にハマっています。今冬は奥多摩の高い雪山にまだいるかもしれない希少動物のオコジョを探し、真っ白な山の妖精の姿を写真におさめたい。

後藤 めぐみさん  
カヤックスクール「グラビティ」

お茶づくりをはじめました! 紫の隅っこにあった茶ノ木を見発見。新芽を摘んで紅茶づくりに挑戦しました。自分で作ったお茶で一服しています。

佐藤 健一さん (51歳)  
獵師・木工家

日本一の勢子になると決めました。愛人にお願ひして仔犬を産んでもらいました。

堀口 美紀さん (50歳)  
看護師

自然たっぷりの奥多摩でできることと言ったら「散策」でした。娘と息子もありの暇に同行。愛犬連れてちょっと道をあっちこっち歩きました。少し高い所から、緑深い木々の隙間から季節を感じ、そして少し大きくなった高校生の子供達と貴重で大切な時間を過ごすことができました。

佐藤 龍造さん (12歳)  
小学6年生

縦走始めました。夏休みにお父さんと、4泊5日で金峰、国師、甲武信岳、雁坂嶺、雲取、七ツ石、六ツ石を通って奥多摩まで歩きました。また、山に登りたい!

堀口 宗一さん (87歳)

毎年、猿や鳥に荒らされてしまう畑に、今年は頑丈な駆除の柵や網を張りました。1人だと大変な作業ですが、ご近所さんや息子が手伝ってくれました。おかげで、夏野菜はほとんど被害に遭わずで嬉しかったです。

橋詰 定健さん  
カフェドラボーブルー

コロナ禍の6月、カフェをオープンした。場所は、奥多摩町柄久保にある自宅だ。ここでおいしい食事とコーヒーをできるだけ安価で提供したいと考えている。営業は、木金土日のみ。青い旗が出たら営業中の合図、そんな気持ちを店の名前の込めて「ドラボ(旗)ブルー(青)」。奥多摩町氷川 1855 tel.080-3007-2989



#06

内田陽子さん—ごはんカフェやませみ

はじめました。 カフェ、

*Yoko Uchida*



## HELLO! OUTDOOR HELLO! YAMAME BURGER

奥多摩が誇るレジャー施設「山のふるさと村」。この敷地内にあるレストランをリニューアルし、オシャレなカフェ「ごはんカフェ やませみ」として再スタートさせたのがピアノ調律師の内田陽子さんだ。「このレストラン内で調律をしていた関係で前オーナーと知り合いになりました。ある時、そろそろ引退したいので誰か後継者を探してほしいと頼まれたんです。それで適任者を1年ほどの間、探していましたけどどうしても見つからなくて。じゃあ内田さんやればと説得されたんですけど、そんな経験もないし最初はお断りしてたんです。でもこの場所が好きだということもあって段々、気持ちが傾いてきてですね。最終的には周囲や家族の理解、協力を得て、意を決してやってみよう!」

このように軒並木を経て、急転直下、夫婦で店をとりしきることに。この春のオープン以来、二人で忙しい毎日を送っている。リニューアル後の目玉メニューはヤマメバーガー。奥多摩らしい食べ物を提供したいという内田さんの熱意が新メニューの完成につながった。

「自分の大好きな奥多摩の良さを少しでも多くの人に伝えたい。だから思い切ってこの仕事を継ぐ決意をしました。でも人生、何があるかわからないものですね(笑)」

#07

鈴木海斗さん—OKUTAMA+

はじめました。 廃校活用 共有スペース、

*Kaito Suzuki*



## JOIN! OUR EXITING SPACE

旧古里中学校の校舎の一角に、「泊まれる・借りられる・学べる・働ける」コミュニティースペースがある。2020年1月にオープンした「OKUTAMA+」だ。運営するのは、弱冠20歳という鈴木海斗さん。17歳で起業した鈴木さんは、南米への語学留学後、この休校活用プロジェクトを知り、参画した。「考えているのはワクワクするような出会いの場を創出できないかということ。誰もが子供の頃の気持ちを思い出して、クリエイティブに生きていく、その起点となるような空間づくりを今は目指しています」

活気ある若者を奥多摩に呼び込みたいという鈴木さん。コロナをきっかけとして「働く」と「遊ぶ」をジョイントさせたワーケーションを視野に、この場が

魅力あるスペースになるよう、プロデュースしているけれど熱い思いを語る。

「もとが学校なので大規模なミーティングにも、個人での作業にも、それぞれ対応できるスペースがある。宿泊できる設備も整っているので親子連れで来ても、仕事と遊びを両立させることができと思うんです」

1階の技術室では子供向けの各種ワークショップを開催したり、CMや映画撮影の貸し出しをしたり、運動会やカードゲーム大会の会場として活用されたり。新しい取り組みによって、かつては賑やかな声が響いていた校舎に、再び、活気が戻ろうとしている。

自然豊かなこの町にアトリエや工房を設ける芸術家や職人たちは、少なくない。その象徴が、「奥多摩のアーティストを訪ねる」というコンセプトのもと、2009年からはじまったアートフェスティバル「おくてん」だ。今年で10回目の節目を迎えるが、3年前からその内容が大きくリニューアル。仕掛け人は、2016年に奥多摩町に移住した、現代美術家の鍛柄大気さんだ。

「これまででは年1回のイベントのことを指していた『おくてん』の概念を拡張して、まちのクリエイティブ活動の総称を『OKUTEN』と再定義しました。『地域クリエイション』という新しい概念を作り、クリエイティブな視点から地域を豊かにしていくなら、と考えたんです」

鍛柄さんは、当時、青梅市にあった明星大学芸術造形学部出身。卒業後も講師として大学に残る一方、自身のアトリエを探すなかで奥多摩町に辿り着いた。2017年からは、「おくてん」のディレクションを手掛けることになり、様々な取り組みを実施。2018年には、明星大学デザイン学部とのコラボレーション企画として、旧古里中学校の技術室をリノベーションし、「おくたま森の工作室」をオープン。子供を対象としたワークショップ「おくたまこども大作戦」を毎年夏に開催するほか、町内外の作家が定期的にワークショップを開催する場としても機能させてきた。

さらに今年度は、新型コロナウイルスの感染拡大防止の休校措置により、自宅学習をしている子供たちのために、学生主導によるオンラインのワークショップ「奥多摩休校大作戦」を開催。「地域」×「教育」×「クリエイティブ」という視点から、斬新なイベントを仕掛け続けている。

「僕がやりたいのは、『地域クリエイション』という概念のハードルを下げること。『クリエイティブ』とは、作家やクリエイターやちのための言葉というイメージが強いと思うんですよ。だから、自分には関係がないと思っている人が多い。でも、ものを作ることだけではなく、創造的な思考から非物質的なものをつくることも『クリエイティブ』だと僕は思う。例えば、毎日の洗濯物もどういう順番で干したらよく乾くかとか、そういうことを考えることも創造的じゃないですか。創造的な思考を身につけるには、やっぱり教育が重要で。創造的な教育を受けってきた子供たちが大人になったときに、きっと創造的にこの町のことを考えることができるようになると思う。そういう長い目での地域活動をしていきたいですね」

なお、2020年秋には、奥多摩を舞台にした書籍「クリエイティブを旅する」を出版。今後は、町唯一の美術館「せせらぎの里美術館」のディレクションを手掛ける計画があるなど、次々に活動の幅を広げていく鍛柄さん。水面に小石を投げるようになじわじわと波及していく“クリエイティブ”的な輪がこの町や人々にどんな影響を与えていくのか。楽しみで仕方がない。



OKUTEN

<http://okuten.jp>

鍛柄さんによる、縄を編んだ巨大な立体作品。労働に近い単調な行為から、縄が、縄で編まれた何かに変わり、新たな物質の「状態」になったもの。現代美術家としての個人の創作活動にも注目したい。

#08

鍛柄大気さん—美術家

はじめました。 地域クリエイション、

*Taiki Sukigara*



例えば、スパイスの効いたインド料理、ココナツが香るスリランカカレー、優しい味わいのサムゲタン、ベトナム風のまぜご飯コムアン・パーなどなど。創意工夫に富んだ、週替わり&日限定のテイクアウト弁当が、一部町民の間で知られるブームになっている。氷川国際ます釣場に併設する「蕪太郎カフェ」のスタッフ、鈴木里華さんが手がける「火曜弁当」だ。きっかけは、新型コロナの感染予防対策として3月から始まった臨時休校。「子どもの食事で困っている家庭の手助けになれば」と、予約制の「こども弁当」をスタートさせた。好評を博したことから、「火曜弁当」として、得意のエスニック料理を中心にしたテイクアウト弁当を始めた。

魅力の1つは、野菜をもりもり食べられること。自家栽培の野菜を中心に、10種類前後の野菜がたっぷり使用され、目にも舌にも体にもおいしい。「意外に野菜を食べない人が多いんだって知ってる。大人になると、自分が嫌いなものは選ばないから、その人の食生活のなかにうまいこと入り込んで、野菜もアリヤんて思ってもらえたらしいなって」と里華さん。こだわりの調味料やスパイス、そして丁寧な調理によって素材の魅力を引き出された野菜料理は、どれも絶品だ。事実、「里華さんの野菜なら食べられる」という野菜嫌いの男子もいるほど。

「火曜弁当」は完全予約制で、奥多摩駅2階の「ポートおこたま」で受け渡しをする。「無駄にゴミを出さない」という里華さんの想いから、各々が持参したタッパーに料理を詰めて提供するルールだ。本業が繁忙期だった8~9月は一時休業したもの、10月からまた再開予定だという。また、冬場には「蕪太郎カフェ」の定休日である月曜のみオープンする。「月曜食堂」を約3年前から手掛けている。本人いわく「隙間ビジネス」という形の情勢の変化に伴って、子供の需要が落ちて一方、大人的ニーズが増加。そこで、毎週火曜のみの「火曜弁当」として、得意のエスニック料理を中心としたテイクアウト弁当を始めた。

魅力の1つは、野菜をもりもり食べられること。自家栽培の野菜を中心に、10種類前後の野菜がたっぷり使用され、目にも舌にも体にもおいしい。「意外に野菜を食べない人が多いんだって知ってる。大人になると、自分が嫌いなものは選ばないから、その人の食生活のなかにうまいこと入り込んで、野菜もアリヤんて思ってもらえたらしいなって」と里華さん。こだわりの調味料やスパイス、そして丁寧な調理によって素材の魅力を



「火曜弁当」の最新情報および注文は、「月曜食堂」のFacebookページにて



「火曜弁当」の最新情報および注文は、「月曜食堂」のFacebookページにて

#09  
鈴木里華さん  
火曜弁当・月曜食堂  
はじめました。



Rika  
Suzuki

## NEW THINGS FROM THE TOWN

町長さん？  
何か新しいこと、  
始まりますか？

新しいアイデアが少しずつかかるとなり、時代とともに変わろうとしている、奥多摩の町。ここでは今年5月、町長に就任した師岡伸公さんにこれからのお取り組みについて聞いていく。  
インタビューを務めるのは、わさびーだ。



町長さん。就任して約4ヶ月ですが、今、どうなことを考えています?

まずは奥多摩がすでに有している「価値」あるものと、削いでいいべきものを整理しなくてはいけません。その先に新しくて、やるべきことが見えてくるのだと考えています。

具体的に奥多摩で何か新しいことが始まるっていう計画は?

そうですね~。たとえば、奥多摩の94%は森林でしょう。観光業をさらに発展させるとしてもこの森林にしっかりと林道を整備していくなければならないと考えています。それから台風や豪雨などで川の氾濫や道路の崩壊があったでしょう。こうしたことで土砂が流出しますが、林道をきちんと整備することで、危険を最小限に抑えられるかもしれません。まったく新しいとは言えないかもしれませんが「道づくり」はこれから奥多摩において大きなテーマのひとつですし、積極的に取り組もうと準備しているところです。

なるほど。奥多摩が発展するとか、災害から人命を守るために、林道を整備するのは重要なんですね。

そうなんですよ。

では、ガラッと話題を変えて、奥多摩の人口減少についてどう考えていますか?これから新しいことをどんどんやって、この町に住む人を増やしていかないですか。この問題、どうすればいいんですかね?

一人でも多くの人が奥多摩に興味を持ってくれたらいいなということで、新しい施策として「0円空き家バンク」を始めたります。でもね、移住してくれればうれしいですが、住所を移すまではいかなくてもまずは奥多摩へ来るきっかけを作ればいいと思っています。

遊びに来るだけで十分ということ?

こういう世時ですから、二地域居住のような形で週末だけでも、良い季節だけでもいい。フレキシブルに奥多摩を利用ほしいということですね。サテライトオフィスのようなスタイルももちろん歓迎。このように移住までいかずとも、奥多摩を利用してもらうための制度とか体制をいま整えている最中なんです。

もっともっと奥多摩と関係を持つ人が増えるってことですね。なんだか楽しそう。奥多摩も少し変わっていきそうですね。

もっともっとよく変わっていくために私が求めていることは何だかわかります?

ん~なんでしょ?

住民の皆さんからの積極的な意見ですね。私たち行政が考えることは、本当に住民の皆さんのライフスタイルと合致しているのか。これをつなげて皆さんと議論していかなければなりません。行政からの一方通行では、奥多摩が良い方向へ進んでいけないですよね。アイデアがあれば町長への手紙でもいいですし、役場の誰かに伝えるということでもいい。

えっ。町長へ手紙なんて出して失礼じゃないの?

喜んでお読みしますよ(笑)。

じゃ、わさびーも意見だそうかな。



そういうふうに新しいことじゃないですが、「口腔ケア」にはもっともっと力を入れようと考えているんです。口の健康は大切です。奥多摩には歯医者さんが少ないでしょう。出張サービスなども多用して住民の健康を口腔ケアによって守っていかないんです。地味ですか?

いえ!良いと思います。わさびーも口の中、清潔にしたいし。

喜んでもらえてよかった(笑)。

そういうふうに町長さんは奥多摩のどんなところが好き?

やっぱり温かい人のつながりですね。都会では味わえない温かさが奥多摩にはまだまだあります。困った時、助けてくれる人が近所にはいっぱいいます。そういう付き合いが当たり前になっているのは素晴らしいことですね。それと、釣りが好きなので釣りを楽しめる場所があるということ。東京の一部なんですが、この大自然は私たちの宝ですよ。

ワサビもよく育つし。

一度、奥多摩に遊びに来て「ここはとても美しい」と思ってもらうことは大切ですよね。ですから美しい景観を楽しめるよう、もっともっと樹木を整備していくとか、フォトスポットを設定するなど、観光で来た方に良い印象を持っていただきたいです。

あ、いま思いついたんですけど、町長さんに提案があるんです。意見は何でもウェルカムって言ってましたよね?

もちろん! どうぞ。

年に一回、「ワサビの日」っていうの作ってはどうかなと思って(笑)。ワサビの日には皆がそれぞれワサビを使った料理を楽しむという…。それから、緑色の何かを身に着けてワサビへの愛を示すとか(笑)。ごめんなさい。自分勝手な意見で…。

それ、いいですね! ワサビは奥多摩が誇る生産物でしょう。そのワサビに対する愛をそれぞれの方が確かめる日。素晴らしいアイデアじゃないですか。

ほんと? うれしい! わさびーにもできることがあればぜひひと言って!

もちろん。わさびーが主役ですから、いろいろとお願いしますよ。

あ、町長さんの名刺、わさびーが印刷されてる!

大ファンなので。これからもよろしくお願いします。

ペコリ。

新しい生き方を応援するまち

# 奥多摩町ではじまる 新・定住支援策

テレワーク化の加速などに伴い、自然豊かな土地での暮らしを求める人々が増えている。実質無償で土地と家が提供される「いなか暮らし支援住宅」など、独自の施策を打ち出し、定住・移住支援に力を入れてきた奥多摩町だが、今年度より新たに移住・定住支援策を拡充。新しい生き方を求める人たちこそ、ぜひ活用してもらいたい。

NEW

0円空家バンク

NEW

奥多摩町定住促進サポート事業

## アトリエや別荘として活用したい人にもオススメ

物件を手放したい人と、物件を活用したい人を町がマッチングする制度。取引価格は0円だが、契約や登記にかかる費用は物件を譲り受ける側の負担となる。年齢要件や定住要件に合致せず、空家バンクを活用できない人や、アトリエ、倉庫、別荘等を探している人でも利用可能だ。町が行なうのはマッチングのみで、物件の案内はできないため、現地確認はセルフで行なうのが条件(現地確認は申し込み前に行なうこと)。物件情報は、同町ホームページにて確認ができる。



0円住宅でオーナーを募集した物件。リフォームすれば利用価値は無限大。



## 移住とともに就業or起業で最大100万円を支給

奥多摩町への移住・定住の促進及び中小企業などにおける人手不足の解消に貢献するため、都内(※条件不利地域以外)から奥多摩町に移住し、就業又は起業した場合、最大100万円の奥多摩町定住促進サポート事業支援金を交付する。転入する直前に、直近10年間で通算5年以上、都内条件不利地域以外に在住していたこと、申請時に50歳以下の者であることなどの移住に関する要件にくわえ、就業する場合は、当町のホームページ等に掲載している求人であることなど、就業・起業に関する要件もある。詳細の条件は、ホームページで確認を。

※都内条件不利地域一覧  
東京都:檜原村、奥多摩町、大島町、利島村、新島村、神津島村、三宅村、御藏村、八丈町、青ヶ島村、小笠原村  
○創業の場合 最大100万円  
○就業の場合  
・単身世帯…30万円  
・2人以上の世帯(複数人世帯)…60万円

RENEWAL

移住・定住応援補助金

## 最大20万円分の商品券補給を新たに追加

次代を担う若者等の定住を応援するため、定住を目的として住宅の購入・リフォーム等をした場合、最大200万円(事業費は10万円以上、事業費の1/2以内)の補助金を交付する。45歳以下の夫婦、18歳以下の子どもを持つ世帯、35歳以下に当たる人が対象となる。また、金融機関などからの資金借入に対する利子補給も行なう(町内金融機関の利用で最大年額33万円)。給付期間は36ヶ月)。さらに今年度より、商品券の補給がスタート。事業補助金の限度額200万円を超えて、次の条件に当てはまる場合は、町内で使える商品券を各々10万円ずつ上乗せして補給する。

1)奥多摩町内に所在する事業所等に事業を依頼した場合  
2)壁、床材に地場木材(多摩産材)を10m以上使用した場合



標高約800m。眼下に山々を望む庄屋の風景が広がる峰集落は、東京で最も高い集落のひとつである。今年の4月、ここ、峰集落の新たな住人として加わったのが、自営業の白鳥薰さんだ。

「奥多摩駅まで車で約30分、スーパーまで約50分。今まで住んだなかで最上級に不便な場所です(笑)。でも、その不便さがまた楽しい」

白鳥さんは、東京出身。一昨年まで地域おこし協力隊として鹿児島県で暮らしていたが、母親が体調を崩したため、東京へ戻ることに。「東京でも自然豊かな場所に住みたい」と考えて候補地を探すなか、心惹かれたのが奥多摩町だったという。移住後、町営住宅に暮らしていた白鳥さんは、15年住めば実質無償で土地と家が町から譲渡されるという「いなか暮らし支援住宅」に応募し、当選。築100年の古民家は、高校生の息子と2人でDIYで改修。また、通勤の負担を考え、リモートワークが可能な仕事に転職。現在、標高800mの暮らしを満喫中だ。

「ネット環境さえあれば、どこでも生きていける時代ですから。ここは本当に静かで景色もいいし、猿や鹿もよく見かけるほど自然が豊か。隣に気にせず大好きなカラオケができる(笑)。今後お店もやってみたいし、夢を膨らませています」



都心から約1時間半、東京最西端に位置する奥多摩町。近年、自然豊かなこの町に、移り住む人が増加中だ。自分らしい生き方を謳歌する移住者へのミニ・インタビュー。

File 05

白鳥薰さんファミリー

# 暮らす 奥多摩町に

自然がいちばん美しいTOKYO



— Welcome to —

## OKUTAMA TOWN

### 東京の森林へ移住定住のススメ

都下での生活と自然豊かな環境を両立する奥多摩町では、移住・定住者を迎えるために、さまざまな支援を行なっている。住宅支援や子育て支援制度も充実しており、ファミリー世帯にも暮らしやすい町だ。

### 移住・定住応援補助金

奥多摩町では、次代を担う若者等の定住を応援するため、定住を目的として住宅の購入・リフォーム等をした方に対して、事業費10万円以上で、事業費の1/2以内、最大200万円の補助金を交付します。事業補助金の限度額200万円を超えて、次の条件に当てはまる場合は、町内で使える各自10万円ずつの商品券を上乗せて補給します。

1)奥多摩町内に所在する事業所等に事業を依頼した場合

2)壁、床等に地場木材(多摩産材)を10m以上使用した場合

○年齢条件 以下の方を対象にしています。

・45歳以下の夫婦 ■18歳以下の子どもを持つ世帯

■35歳以下の方

### その他

いなか暮らし支援住宅、空家バンク制度、安く家が借りられる町営若者住宅、多子家庭の助成制度など、ほかに定住および子育てにまつわるさまざまな支援を行なっています。

お問い合わせ: 奥多摩町定住応援総合窓口 Tel.0428 83 2310 <http://www.town.okutama.tokyo.jp>

### 住宅資金借入の利子補給

奥多摩町では、次代を担う若者等の定住を応援するため、金融機関などからの資金借入に対する利子補給を行なっています。条件は、400万円以上の融資を受け、償還期間が10年以上であること。町内金融機関を利用する場合は、最大年額33万円まで補給します。給付期間は36ヶ月。

○年齢条件 以下の方を対象にしています。

・45歳以下の夫婦 ■18歳以下の子どもを持つ世帯

■35歳以下の方

### 子育て支援

子育てのしやすい町をめざし、町独自で15項目の子育て支援事業を行なっています。園・小学校・中学校・高校・大学等の支援や、保育料はじめとした学校給食費、中学制服代、高校生通学定期代など、子育てを頑張っている方への負担を軽減するための助成があります。また、都の制度を拡充し、所得基準を超えた世帯にも医療費を全額助成します。

Edit & Text & Photo: Yukiko Soda [miguel] Piroshi Utsunomiya [miguel] Art direction: Atsushi Kodani Illustration: Toshiyuki Hirano

発行:東京都奥多摩町 <http://www.town.okutama.tokyo.jp> 編集&制作:株式会社ミゲル 〒198-0101 東京都西多摩郡奥多摩町大丹波640 miguel@dg9.so-net.ne.jp <http://www.miguel-web.info>  
2020年9月発行 本誌は奥多摩町内の各観光施設、JR青梅線各駅構内、都内協力店などで配布しています。店頭などで無料配布にご協力いただける施設を募集中です。ぜひお問い合わせください。  
Cover story: 朝陽ははじまりをイメージ。山肌と清流が朝霧に照らされてキラキラときらめく。この町で、人知れず繰り返される日常のシーンだ。

